鈴鹿大学・鈴鹿大学短期大学部紀要
健康科学編 第1号 2018

養護教諭が行う性教育指導の展開

―学生の考える受けたい性教育授業から―

大野 泰子[1]

要旨

子どもを取り巻く現代社会の背景は、性情報の氾濫や子どもの性行動の早期化など予想以上に正しい判断が難しい現状がある。自己肯定感の低下や、性の多様性の対応など現在の社会背景から、性教育に対する新しい視点が求められていると考える。

養護教諭の7割が行っていると報告されている性教育指導を、養護学生の視点を交えた児童生徒が受けたくなる性教育の指導案と教材を校種別に作成し、実践発表を行った。

学生自身が性教育指導を受け役に立ったと7割が感じており、性の開放傾向と閉鎖傾向の中で命と心を護る教育の必要性を感じ、性教育のこれからを考えることができた。

キーワード

性教育，校種別，LGBT，学生の視点，養護実践

１．諸言

学校保健における健康課題の一つとして、性をめぐる成長のトラブルがある。学齢期は心身の発達が著しい時期であり、大人として成長する上で心と体に関係する「性に関する学び」は重要である。健康教育の中で保健学習として授業で心身の発達発育について学ぶが、個人差が伴う学びであり教師も児童生徒においても指導内容の課題が大きい状況がある。また、性に関するインターネットなどの情報は様々氾濫し、不安に拍車をかける現状があり、児童生徒に対し適切な指導が求められる現状がある。

2015年文部科学省は、2013年度に行った調査結果から、性の多様性に対する学校現場対応の実施について、新たな人権的配慮として文部科学省からの通知や2016年教職員向けパンフレット配布などを行っている。これまでの学習指導要領設定の教育背景を超えた現在の性に関する状況に対し､今後の性教育の新しい視点が求められていると考えられる。性教育を重要と考える養護教諭においては、自身も健康教育にもどかしさを感じ、さまざまな取り組みを行い始めてはいるが、いまだ不十分な状況がうかがわれる。

本学2年学生は養護実習を経験する中で、性教育に対する自己体験や学校現場での教育のあり方を学んできていた。学校保健演習授業では、養護教諭が行う主要な健康教育を中

[1] こども教育学部こども教育学科養護教育学専攻

心に教材や指導案作りを行っており、養護実践として必須である性教育の方法を考える目的で指導案を対象別に作成させ、模擬授業を行う機会を設けた。学生の実態に即した発想による、新しい視点を共有させた。

２．　研究の背景

2.1 学校教育における児童生徒の行動や意識の変化

性教育は 1990 年頃より学校教育に取り組まれてきた経緯がある。戦後体育における健康教育は、1947 年第１次学習指導要領において心身の健全な発達を目標に学習指導が行われてきた[1)]。1989 年第３次学習指導要領の改訂により小学校の体育授業に「保健」の教科書が初めて導入され、第７次改訂では小学校３・４年生から体の発育発達の理解が学習内容に取り上げられた。しかし、2000 年代前半に学校での「行き過ぎた性教育」に対する批判・非難、バッシングがあり、教育行政において慎重な取り組みが求められた時期があった。そのため性教育の取扱は、保健学習の教科指導中で心身の発育発達を理解できるよう、また保健指導として養護教諭や担任等における健康相談が行われている。しかしながら、子どもを取り巻く現代社会は性情報の氾濫や子どもの性行動の早期化など、予想以上に深刻で厳しい現状がある。古荘順一は[2)]、子どもを含む親子の自己肯定感の低下が個人の人権意識を低下させ、関係する健康課題として不登校・いじめや虐待等により表出している傾向があると述べている。

2012 年日本学校保健会「学校保健の課題とその対応」では[3)]、2010 年実施の「養護教諭の職務等に関する調査」の結果がまとめられている。学級活動における保健指導の実施率について、小学校 70%、中学校 37%、高等学校 14%、特別支援学校 52%であった。その実施した内容は、性に関する指導が 55%（小 59%、中 52%、高 58%、特 9%）、歯・口 46%（小 68%、中 36%、高 13%、特 68%）、の結果であった。性に関する指導はエイズ教育 13%を含めると 68%の実施となり（小 67%、中 71%、高 79%、特 51%）、養護教諭の保健指導は、学齢期の体の成長指導を約 7 割が実施している結果であった。さらに保健学習への参画は小学校 36%、中学校 14%、高等学校 4%、特別支援学校 12%であった。養護教諭の担当した単元は、小学校は「育ちゆくからだとわたし」77%であり、中学校は心身の機能の発達と心の健康が 46%、高等学校は現代社会と健康（健康の保持増進と疾病予防）40%であったと報告されている。

2011 年日本性教育協会が行った第 7 回青少年の性行動全国調査[4)]は、青少年の性行動や意識の変化を全国規模で時系列に把握することができる。継続的に行われた調査結果から、日本の青少年の性に関わる意識の実態変化を明らかにし、社会的背景に関連させながら理解することが必要と述べている。その変化について、デート経験は中学生・大学生は男女同率に近いが、高校生は女子のほうが上回る傾向があるが、今回の調査では初めて減

少傾向が見られた。キス経験は、2005年までは男女とも上昇傾向があったが、今調査では中高大学生において男女ともに減少傾向が見られた。性交経験は、キス経験と同様の減少傾向が見られた。1999年、2005年は経験率が最大であり、大学生男子53.7%女子46.0%、高校生男子14.6%女子22.5%で10%の減少がみられ、中学生男子3.7%女子4.7%はほぼ変化なしであった。これは性行動が低年齢化・活発化する中で、特別な事ではなく日常生活化した現象と述べている。また、現代における青少年は性経験が豊富ではないが、性経験があってもおかしくない現状にあるという。今日性教育として位置づけられる教育が以前より広く展開されるようになり、必要な性教育の事項は学校で行われ続けてきた様子がうかがえた。また心理的側面を以前より取り扱っている結果がみられた。近年の性情報源はインターネットの影響力が大きく、性に関する興味的な情報が正しい判断に悪影響を与えていることも懸念されるとまとめられている。

2.2 性の多様性への配慮

近年、性の多様性について当事者発言や公的な機関でのジェンダー理解が進展している。文部科学省は2013年全国小中高等学校及び特別支援学校を対象とした「性同一性障がいの実態調査」を行い、翌年調査結果から性同一性障がいに係る相談が606件あったことを公表した。中学校110件（18.2%）、高等学校403件（66.5%）からの回答が多いが、小学校は93件（15.3%）であるが、低学年で4.3%の回答がみられ、様々な学齢での困難感を抱える児童生徒が存在することが明らかになった。2015年文部科学省は、「性同一性障害に係る児童生徒に対するきめ細やかな対応の実施について」を児童生徒課長名で具体的な対応を通知し、さらに2016年には教職員向けのパンフレット[5)]が配布された。服装、髪型、更衣室、トイレ、体育授業、部活、学校行事（宿泊研修）などの配慮が明記された。日高らが2013年度までに行ったLGBTに関する教員意識調査[6)]では、学校現場の教員は「教える必要があるが知識不足で、指導方法が不明」と指導の手探り感を答える教員の報告がある。現在学校における体の発達は体育科で小学校4年生、保健体育科中学校1年生で扱っており、男性女性の規定概念で学習を展開していたが、心と体が相反する児童生徒の存在を配慮した新しい指導案の工夫が急がれている。

３．研究方法

2017年7月、A短期大学生19人に対する学校保健演習Ⅱの授業において、グループワークによる性教育指導案を作成し、模擬授業を行った。グループは対象年齢を小学校低学年、高学年、中学生、高校生、特別支援学校児童とし、指導方法・教材の工夫を行わせた。作成したものは性教育実践のガイド資料となるよう配布し、卒後の活用を目的とした。

また学生の性教育意識調査は、学生が受けたい授業内容の関係を知るために行った。調査は無記名自記式調査で、①実習校の性教育の有無、自身の性教育の必要度、小中高の性

教育経験と有効性の感想、②学校教育における指導適任者、指導内容、性交の説明、コンドーム指導、③将来の結婚、結婚と性行為、個人の相談者、家庭内の性に関係した会話について模擬授業発表後に実施した。結果をエクセルによる単純集計し、考察を行った。

４．結果

4.1 短期大学生の授業展開と求められる指導内容の傾向

養護教諭の保健指導における性に関する指導の割合が高く、学生自身も養護実習の参加後であり、児童とのかかわりの中で性教育の必要性を考えていた。

健康教育には、保健学習と保健指導の方法があり、主に学校保健年間計画に位置付けて、学級活動時間に実施されている。保健学習教科書を参考に、グループで養護教諭が行う性教育を、小学校低学年、小学校中高学年、中学校、高等学校、特別支援学校の５区分に分けて指導案作成と模擬授業を行った。

指導案は以下のとおりである。

表１．性教育の指導のねらい

	指導観
小学校低学年	小学校３年生を対象とする。前回体の成長の授業を行ったと想定し、心の成長を取り上げた授業である。心の違いは目に見えない内容のため、イメージしにくさがあり、丁寧に教材と解説を行いながら進める。体の性と心の性がイコールではないことを理解させる。
小学校中高学年	体の成長に伴い、心の成長も自己肯定感の芽生えとなり重要である。児童が抱える様々なストレスの原因を知り、ストレスの対処法の中から、自分に合ったものを実践できるようにする。
中学校	性に関する情報は近年スマートホンで簡単に手に入れることができるが、興味を引くように作られた偽りの情報もあり、適切な判断や責任ある行動が必要であることを理解させる。中学２年生の同学年でも男女による考え方の違いがあることを知り、相手を尊重することを理解させる。
高等学校	性意識は男女差があり誤解やトラブル防止のための留意点を具体的にあげていく。ネットや SNS の情報は誤った性情報が多く、その問題点を理解させる。誤った性行動から不安や悩みがある場合は、一人で抱え込まず相談をすることが重要であることを理解させる。
特別支援学校	自分の体の成長から、できるようになったことを学習する。体の役割を知ることによって自分の体に興味を持てるようにする。男女の性器の違いやプライベートゾーンなど、正しい知識を身に着け、自分の体も友達の体も大切にしていこうとする気持ちを育てる。

4.1.1　小学校低学年の指導案

主題名：心のちがい

本時の学習：言葉には相手を傷つけるものがあり、相手の立場に立って言ってはいけないことを考えることができる。（思考・判断）
体の性と心の性は同じでない場合があることを理解する。（知識・理解・態度）
一人ひとりに異なる個性があることを理解する。（知識・理解・態度）

資料：男女の図、吹き出し、色のカード

	学習内容	指導上の留意点
導入	前回の復習	男女の違いとは何か、なぜ性器を大切にするのか、授業後の行動など
展開	好きな色は何か、休憩時間にはどんな遊びをするのか、自分たちのことを発表する。 個性について発表する	意見を板書する。 男女の図を使い好きな色や遊びは男女とも様々であり特別な事ではないことを伝える。 体の性と心の性が同じでない場合もあってよい事を説明する。 個性の説明をする。
整理	授業の学びと感想をプリントに記入する。	授業後不安や悩みがあれば、保健室で相談ができることを伝える。
工夫したところ	心の性と体の性が異なることもあること、１人ひとりの個性があることを理解させる。本時では性的違和を感じている児童を配慮し、児童から嗜好に対し批判的な意見が出ないよう、性に対する意見は聞かずに行う。	

4.1.2　小学校高学年の指導案

主題名：心と体のつながり

本時の学習：心と体はどのようにつながり、互いに影響し合うのか理解する。自己と他者の違いを知り、相手の考えや気持ちを受け入れる態度を育てる。自己にあったストレスの対処法を見つけ、実践することができる。

資料：豆うつしゲームの図、皿、箸、豆、ワークシート

	学習内容	指導上の留意点
導入	心と体のつながりについて考える。 班で、豆うつしゲームを行いストレス体験する。	心と体のつながり体験ゲームは順位を決め、最下位に罰ゲームをすると説明する。意識してゲームを行わせる。
展開	ゲームを振り返り、心と体の影響について意	ストレッサーによって、体や心がいつもと違

	見を出し合う。 心の状態で体におこる変化を考える。 どんな時に不安や悩みを感じるのか、どのようにその時に対処しているのかワークシートにまとめる。 班で話し合い、対処方法をまとめ発表する。	う状態になることを気付く。 心と体は繋がりがあるが、個人差があることも伝える。 むかつくと思ったことがあるか質問し、思春期におこる体の変化により気持ちに変化が現れていることを説明。対処法に個人差があることに気付く。対処法にはストレス増加につながるものもあり、自己選択させる。
整理	学習のまとめ ワークシートに記入する。	状況から、自分にとって最善の対処法を考え、判断することを伝える。
工夫したところ	授業はじめのゲームは、心と体の変化を実際意識して体験することができ、想像しやすいようにしている。体のしくみでは、視覚的に理解しやすいようにしている。テレビゲームなどの適切でない対処法にも触れる。現実のストレスに対し、どう対処していけばよいか、小学校高学年で身に付けさせたい。	

4.1.3 中学校の指導案

主題名：すれ違い～あなたはどう思っているのか

本時の学習：思春期の心の変化を理解する。性に関する適切な態度や選択の理解を深め行動につなげる。異性や性情報についての関わりや行動について考える。

資料：中学生男女の図、吹き出し、ワークシート

	学習内容	指導上の留意点
導入	思春期に性への関心が高まることを理解させる。 性意識は個人差があることを知る。	生徒の男女交際の状況から、交際について考えさせる。
展開	中学生の男女の図を用い、お互いが気になっている事、告白、交際の視点から感じ方や考えの違いを発表させる。 異性に対する理解と尊重が重要であることを理解する。性情報の中で正しい選択をし、適切な行動をとることが大切であることを学ぶ。	男子はスマートホンを使って性行為について知識を得て興味がある。女子は男子が好きだが、性行動は躊躇がありプラトニック関係を望んでいる。
整理	性に関する関心が高まることは自然であるが、責任ある行動が大切であることを振り返る。	板書を使い振り返りをする。

工夫したところ	中学生に共感がわくようにストーリー性に展開する。吹き出しの単語により、イメージしやすく考えが深まるようにした。中学生の発達段階に合わせて授業するよう内容を考え、授業では答えやすいような問いかけを工夫する。

4.1.4　高等学校の指導案

主題名：性意識と性行動の選択

本時の学習：性意識に関する男女の特性を知り、性差を理解する（知識・理解）。性情報が性行動の選択に及ぼす影響を理解し、対処行動がとれるようにする。

資料：発問・解説の図、イラスト、リアクションペーパー、グループワークプリント

	学習内容	指導上の留意点
導入	男女の考え方や行動の違いはどのようなものがあるのか考える。 男女の考え方や行動の違いは､脳の違いから生じることを知る。	様々な面から意見が出るようにする。 本能から違いが生じることを知る。
展開	男子と女子の考え方・行動の事例を紹介し、グループで問題点を話し合わせる。 グループ毎の意見を発表する。	自分の意見、人の意見を聞くことができる。 全ての人が発言できるよう配慮指導する。 発表した問題点を板書し、解説する。
整理	なぜ誤った行動をとったのか原因を考えさせる。 授業から考えたこと感想を記入する。	正しい情報、誤った情報があり、情報の善し悪しを確かめることが大切であることを気付かせる。感想の内容から､学びを評価する。
工夫したところ	男女の性意識が脳や本能によることを理解させたうえで、性行動の誤りを気付かせる。生徒の意見を中心に、発問は具体的に行い、正しい情報を選択できるよう、様々な情報をうのみにせず疑う視点を持たせる。	

4.1.5　特別支援学校の指導案（小学校２年生）

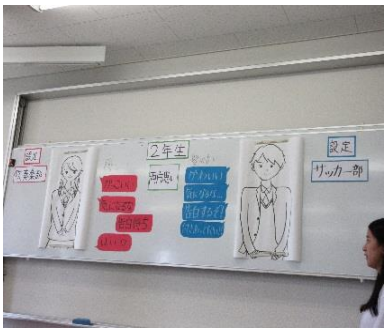
主題名：たいせつなからだについてかんがえよう！

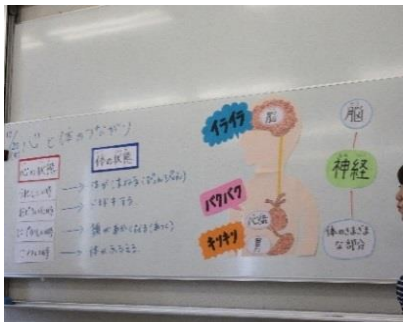
本時の学習：男女の体の違いについて知る。体の成長について知る。

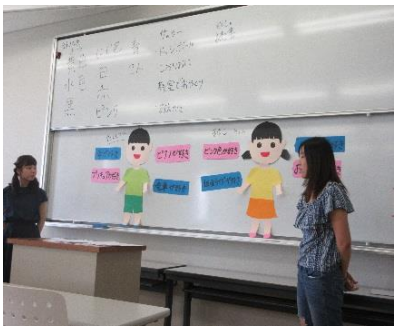
資料：男女の体の図、子宮・精巣の図、体のパーツ図

	学習内容	指導上の留意点
導入	人の体の部分の名前を発表する。 授業の目当てを知る。	
展開	男女のグループ学習 男の子と女の子の体はどこが違うと思いますか、考えてみよう。	男女の体と体のパーツの絵を示す。 意見が出ない時は補足説明する。 自分の体や行動を思い起こさせる。(思考・判断)

	男女の体の違いについて知る。	
整理	体を大切にするためにはどのような事をすればよいでしょう。	男女の体の違いが分かり、子宮・精巣を守るにはどうすればよいか考えさせる。（知識・理解） 体の仕組みに興味を持たせることができたか。（関心・意欲・態度）
工夫したところ	絵やプレートを使って視覚と聴覚で学ぶ工夫をする。体のパーツを使い仲間と協同しながら楽しく学ぶ工夫を行う。	







4.2 短期大学生の意識調査

短期大学生女子 19 人に対し質問紙による意識調査を行った。そのうち養護実習を経験した学生は 17 人であり、その学校現場では 13 人（76.5%）の養護教諭が何らかの保健指導を実施していて、7 人（41.2%）が性教育を実践していると答えていた。学生自身がこれまで性教育を受けた校種の質問では、小学校 9 人（47.4%）、中学校 12 人（63.2%）、高等学校 14 人（73.7%）が性教育を受けたと答えていた。さらに、その性教育が役立ったかの質問では、高等学校の性教育で 14 人（73.7%）が役立ったと答えていた。（図 1）

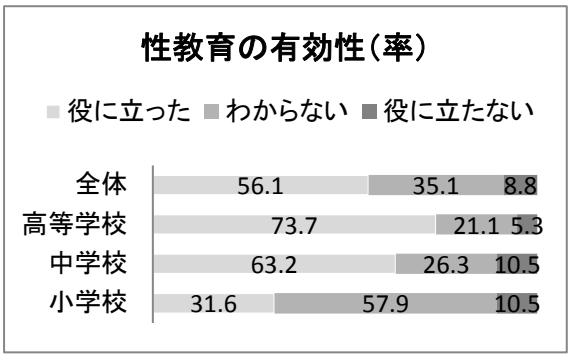


図 1　学生の性教育の有効感

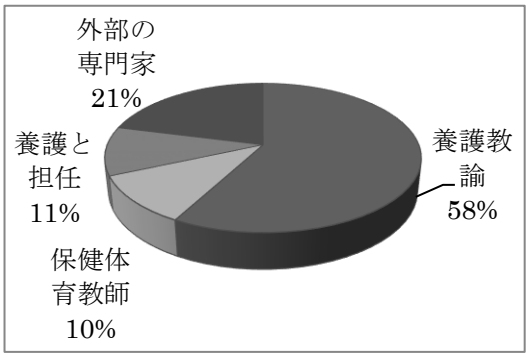


図 2　性教育の指導適任者

性教育は学生全員が必要と答えており、指導適任者は、養護教諭 11 人（58%）、外部専門家 4 人（21%）、養護教諭と担任 2 人（11%）、保健体育科教師 2 人（10%）と答えていた。（図 2）指導内容について、二次性徴の不安の解消を含め正しい知識を持たせる必要があると全員が回答していた。さらに現在学習指導要領では取り扱わないことになっている小学生に対する「性交」の知識は 9 人（47.4%）が必要、6 人（31.6%）が不要と答え、中学生のコンドームの指導は 16 人（84.2%）が必要、2 人（10.5%）が不要と答えていた。

学生自身が家庭で性の話をしているかの問いでは、12 人（63.2%）がないと答えており、したことがある学生は 7 人（36.8%）であった。

将来の結婚・出産の希望については、17 人（89.5%）は肯定的で、2 人（10.5%）が否定的な回答であった。性行為に対する考えは、婚前でも避妊（彼・私）をすれば良い 10 人（52.6%）、結婚するまでしない 4 人（21.0%）、考えられない 2 人（10.5%）、婚約すれば良い 1 人（5.1%）であった。家庭で性の話をしたことがない人は、結婚まで性行為はしないと全員が答えており、話をしたことがある人は、避妊すればよいと答えた人の 7 割近くであった。

学生の性に関する悩みの相談者は複数回答で、友達 13 人（68.4%）、母親 9 人（47.4%）、教師 9 人（47.4%）、産婦人科 3 人（15.8%）、姉妹 1 人（5.3%）、彼 1 人（5.3%）であった。

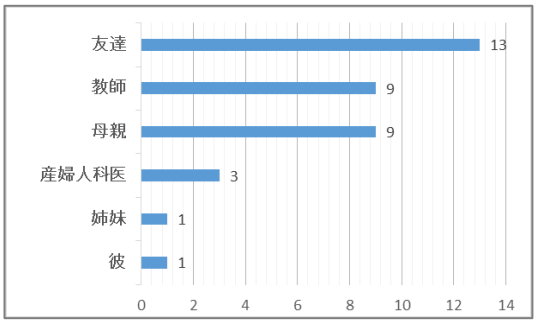


図 3　性に関する相談者（複数回答）

5.考察

性教育は、2012 年日本学校保健会の調査では、学級活動における保健指導として現場の養護教諭の 7 割近くが実施しており、保健学習も二次性徴の部分の指導を担当していると報告されている。A 短期大学学生の調査では、小中校高等学校において過去半数近く性教育を受けており、その学びは役に立ったと答えている。数見は [7]、近年からだの成熟の早

期化に伴い、思春期・青年期が長くなっており、自己コントロールして生きる知恵や理性、判断力をはぐくむ「生きる力」の教育は一層必要であると述べている。学生調査の結果、他の校種より高等学校で受けた性教育が役に立ったと答えていた。これは数見のいう「生きる力」の教育そのものであり、卒後生徒の今後の人生の幸せを願う「性の学力」[8]として教育を行ったと推測する。発育発達に応じた保健指導や健康相談を行う上で、「性の学力」はマイナス思考ではなく人間を豊かにしてくれる教育として位置付け、養護を掌る養護教諭教育には欠かせない教育の部分であるといえる。

学生が作成した指導案には、学校種別学年別対象の発育発達を感じる内容が含まれていた。小学校低学年では、まれに性別違和を感じる時期でもある報告から、考慮した作成が行われていた。高学年は、心と体の相関していることを取り上げてストレスを題材としており、中学校においては思春期の男女の心の中をストレートに表現して、考え方の相違や交際のルールを考えさせていた。中学校と高等学校の教材ではスマートホンが情報ツールとして登場しており、間違った情報が誤解や健康を害することにつながることを押えている。学生が自分自身に置き換えて作成した、受けたい授業の指導案は、学習指導要領に沿っている部分もあるが実践的で、指導者にインパクトを与える部分が見られた。学生は指導案を使い授業実践発表を行う中で、楽しく、ためになる自己実践授業を完成させていた。

一方学生自身の質問紙調査は、保健指導で小学生に性交について授業で取り扱うことは9人（47.4%）が必要と答え、中学生のコンドーム指導を16人（84.2%）が必要と答えていた。避妊を具体的に中学生で必要と答えたことは、その年齢で性行動が始まることを予測しての答えと思われる。さらに、家庭で性の話をする機会がある学生は 7 人（36.8%）で、性の話しができる家庭環境の学生は、婚前でも避妊をすれば性行為をしてよい答えが多かった。性に対する家族との関わりが包み隠すものではなく、健康な成長の現れとして肯定的に話される家庭環境の兆しであろうか。今後の経過を見守りたいところである。

2016年小川の報告[9]では、結婚に関係なく性行為をしても良いと48%が考えている結果が報告されており、養護教諭学生の本調査も同程度であった。しかし、性の風潮の変化があり、望まない妊娠でやむなく嬰児を放置死したりする報道も後を絶たない。避妊方法についての正しい知識は中高生時期と同時に、思春期・青年期の生徒たちに性行動の精神的な影響や生き方を教育的にフォローすることも重要な「性の学力」スキル教育ではないかと考える。学校の性教育の指導者は誰がよいかの質問では、養護教諭11人（57.9%）が答えていたが、外部専門家は4人（21.1%）と答えていた。養護教諭は常に新しい情報を学び、養護学の専門職として「性の学力」向上となるよう、科学的な知識・判断力・倫理観をはぐくみ、教員や児童生徒の指導者の自負をもっていきたいと考える。

６.結語

性の教育は学習指導要領に基づき、全ての学校においても行われている。また養護教諭は、性教育に 7 割がかかわりを持っている。今日的時代背景の中で、体格は早熟傾向になり、若者の性行動も早期化がみられる。また性の多様性も声を発し、固定概念が変わる社会現象が見られる。学校教育において様々なセクシュアリティに関する配慮がもとめられ、性教育も同時に新しい視点で作りかえる時期であるともいえる。

これらの状況の中で、養護教諭学生自らが受けたい性教育を意識して指導案や教材を作り、発表する授業を行い学生作の指導案には、学校種別学年別対象の発育発達を意識した内容が含まれていた。養護教諭が「心が生きる＝性」の授業を行うことにより、命や健康を意識した教育が実施され、児童生徒に特別な教育の種が育つことになるだろう。

養護教諭教育において疾病予防や安全教育は重要であるが、児童生徒が将来自己のアイデンティティ形成に影響する「性の学力」教育ができるよう、実践力養成を目指すことは課題といえる。「性の学力」はマイナス思考ではなく人間を豊かにしてくれる教育として位置付け、養護を掌る養護教諭の教育には欠かせない分野であるといえる。

引用文献

1）学習指導要領の変遷：http://www.gakutairen.jp/yoryo/、Accessed Novembre 10,2017
2）古荘純一（2009）:「日本の子どもの自尊感情はなぜ低いのか」P159-163
3）日本学校保健会（2012）:「学校保健の課題とその対応－養護教諭の職務等に関する調査結果から」P103-108
4）日本性教育協会（2013）:「若者の性」白書　第 7 回青少年の性行動全国調査報告、小学館　P15-24
5）文部科学省、性同一性障害や性的指向、性自認に係る児童生徒に対するきめ細やかな対応等の実施について（教職員向け）2016 年
6）日高康晴（2016）:「児童生徒の人生を変える先生の言葉があります」平成 26 年度厚生労働科学研究費補助金エイズ対策政策研究事業　個別施策層のインターネットによるモニタリング調査と教育・検査・臨床現場における予防・支援に関する研究
7）数見隆生（2014）:「第 4 章　学校における性教育」、学校保健ハンドブック第 6 次改訂、P93、教員養成系大学保健協議会編、ぎょうせい
8）数見隆生（2010）:「10 代の性をめぐる現状と性の学力形成」、かもがわ出版 P145-158
9）小川真由子、引田郁美（2016）：大学における性教育についての一考察―短期大学生における性意識と性行動の調査から、「鈴鹿大学短期大学部紀要」36,77

筆者の所属と連絡先

所属：鈴鹿大学　こども教育学部　　Email：ohnoy@suzuka-jc.ac.jp

Development of Teaching Methods for Sex Education by Yogo Teachers
—Through the Sex Education That Children Want to Take—

Yasuko OHNO

Abstract

It is necessary to develop a new viewpoint in regards to sex education, one that is informed by contemporary society which has the declining of self-affirmation and the diversity of sex. It is reported that 70 percent of current Yogo teachers practice sex education. This time, with the participation of students, they developed the presentation, according to school type and teaching materials that children were interested in. This became a good opportunity for students to learn the importance of education about life and the mind. It was a big step forwards developing sex education for the future as well.

Key words

sex education, by school type, LGBT, viewpoint of student, nursing practice